

第2章 生物多様性流域対話の開催

1. 開催概要

(1) 開催趣旨

第1期から第3期までの「伊勢・三河湾流域保全・再生調査」をふりかえり、平成22年度前半に実施した第4期調査の結果をもとに、地域の現状と課題を共有するための「場と輪づくり」を目的として、平成22年8月22日に、「取り戻そう 暮らしを支えるいのちのつながり 生物多様性流域対話」を開催した。

広報として、開催案内チラシ300部を作成し、伊勢・三河湾流域保全・再生調査の調査対象団体(67団体)調査実施団体等へ配布した。また中部地方環境事務所メールマガジン等で開催案内を配信した。なお、会場では、第3期までの「伊勢・三河湾流域保全・再生調査」のとりまとめ冊子を参加者に配布することで、同調査について参加者の理解を深めてもらった。

表5：生物多様性流域対話の開催概要

名称	取り戻そう 暮らしを支えるいのちのつながり 生物多様性流域対話
日時	平成22年8月22日(日) 12:00~17:00
場所	岐阜県立森林文化アカデミー 森の情報センター
主催	環境省中部地方環境事務所
共催	伊勢・三河湾流域ネットワーク、伊勢湾・三河湾流域再生交流会議

生物多様性流域対話プログラム

11:30 - ● 受付 (森の情報センター)

12:00 - ● 「味わって知る」地域のめぐみ
 /NPO法人山菜の里いび
 山菜を使った料理を提供いたしますので、おにぎり等主食をご持参ください。

13:30 - ● 「流域のこれからを考える」全体対話集会
 ● 趣旨説明 /環境省中部地方環境事務所
 ● 伊勢・三河湾流域再生調査報告 /伊勢・三河湾流域ネットワーク
 話題提供1：河川上流域の森の再生と地域づくり
 話題提供2：川の再生と生物多様性
 話題提供3：流域の森里川海づくり
 ● 全体まとめ
 コーディネーター/NPO法人森と水辺の技術研究会 野村典博

17:00 ● 閉会

会場案内
 岐阜県立森林文化アカデミー 森の情報センター /岐阜県美濃市菅代88番地
 当日連絡先 /TEL 090-9540-4747

お問い合わせ先 /TEL 052-955-2131
 環境省中部地方環境事務所 (担当/例 (ます)・霞川)

参加希望の方は、下記に必要事項を記入の上、FAXまたはE-mail (件名に「生物多様性流域対話」参加申込みと明記)にてお申込ください。申込〆切は、8月16日(月)です。

「お申込フォーム」

「生物多様性流域対話」参加申込書	
氏名	参加人数 名
所属	
住所	
電話番号	メールアドレス

※ご提供いただきました個人情報はこのプログラムの運営のみに使用し、法律に基づき適正に管理いたします。

参加申込⇒ E.mail REO-CHUBU@env.go.jp FAX: 052-951-8919 /中部地方環境事務所

図8：開催案内チラシ

表6：プログラム概要

開会 12：00	
「味わって知る」地域のめぐみ 12：05～13：00	小寺春樹（NPO法人山菜の里いび）
「流域のこれからを考える」 全体対話集会 13：00～17：00	趣旨説明：田村省二（環境省中部地方環境事務所） 伊勢・三河湾流域保全・再生調査報告 近藤朗（NPO法人生物多様性フォーラム・伊勢・三河湾流域ネットワーク）
	話題提供1 吉村卓也（岐阜市自然環境課） × 曾我部行子（NPO法人生物多様性フォーラム）
	話題提供2 小寺春樹（NPO法人山菜の里いび） × 山崎真由美（NPO法人名古屋NGOセンター）
	話題提供3 小森胤樹（若き林業従事者） × 杉野賢治（伊勢・三河湾流域ネットワーク）
	流域のこれからを考える コーディネーター 野村典博（NPO法人森と水辺の技術研究会）
閉会 17：00	

(2) 開催記録

第1回生物多様性流域対話には、伊勢・三河湾流域の生物多様性保全に係わる団体、市民等、30名が参加した。

1) 「味わって知る」地域のめぐみ

NPO法人山菜の里いびにより、沢あざみ、ヨモギ等の山菜を中心に、地域の食材を活かした昼食が提供され、里山の恵みを活かした生業（なりわい）の実践例について学んだ。参加者は食事を楽しみながら交流を深めた。

2) 「流域のこれからを考える」全体対話集会

【趣旨説明】

環境省により、生物多様性流域対話の開催趣旨と背景、中部地方環境事務所のCOP10に向けた取り組みなどについて説明が行われた。

【調査報告】

伊勢・三河湾流域ネットワークにより、伊勢・三河湾流域保全・再生調査の背景と趣旨、第1期から第3期までの調査内容、成果と課題、第4期調査のねらい等について説明が行われた。

【話題提供】

岐阜市自然環境課、及び達目洞の自然を守る会の調査報告では、地域の自然環境を守るために行政と市民団体が連携して取り組む重要性や、岐阜市における環境アドバイザー制度の取組等の先進性について報告された。またNPO法人山菜の里いびの調査報告では、地域での暮らしを持続的なものにしていくための特産品開発や、定住支援のための取組、地域の子供たちを活動の中に取り込んでいく重要性等について紹介された。郡上の林業従事者である小森氏への調査報告では、地域内での取組を通じて、流域内での経済循環の重要性、地域での営みが継続されてこそその生物多様性保全であること等について報告された。

【全体対話】

話題提供を受けて、地域の課題を共有化することの重要性、都市と農山漁村が互いに共存していくための仕組みづくりの重要性、流域における流通と消費の循環の推進等について、さらに、調査結果などを共有して広げていく機会の必要性などについて議論が交わされた。全体対話における主な意見は以下の通りである。

流域保全・再生調査の意義について

- ・ この調査は、流域で生じる様々な問題について「理論的なことはわからないが、何かがおかしい」と感じ始めた環境団体が開始したものであり、自分たちとは違う分野で活動する団体も含めた他団体の生の声を聞きながら情報を集めることで、地域の課題や解決のための知恵を共有する「場と輪づくり」が進められている。
- ・ この調査を通じて、今まで環境にしか目を向けてなかった団体が、生物多様性保全の担い手である生産者の視点の重要性を認識しはじめている。

地域の営みを含めた生物多様性保全の重要性

- ・ 環境保全を考えるためには、経済面も含め、地域で暮らしや生業が成り立つことを考えなければいけない。環境はあくまで結果であるために、結果に対応するのではなく、予防原則¹の意味からも、市民も様々な決定に参加していく仕組みが必要である。
- ・ 行政、企業、市民等が、地域の課題を共有し、課題の解決に向けて、適切な役割分担をしていくことが重要である。

都市と地域が持続的に存続していくために

- ・ 都市は、農山漁村の生物多様性の恵みに依存しなければ存続することはできない。今後は、今までとは違う新しいシステムの構築が重要である。
- ・ 環境という切り口を通じて、グローバリゼーションとは違う社会構造をどのように構築していくかを考えていくべき。これまで地域外へと展開していったものを、もう一度地域内に戻していく。流域の中で作られたものが流域の中で流通・消費されるように、流域内で循環する仕組みを構築していくことが重要である。
- ・ 「ちょこっと林業」、「割り箸プロジェクト」や地域通貨の導入等は、流域内でのフェアトレード²を取り戻していく取組である。地域内で経済を循環させ、皆が少しずつ得と無理をすることが結果として環境保全になり、こうした営みの継続が持続可能な社会の構築につながる。

¹ 予防原則とは、化学物質や遺伝子組換えなどの新技術などに対して、人の健康や環境に重大かつ不可逆的な影響を及ぼす恐れがある場合、科学的に因果関係が十分証明されない状況でも、規制措置を可能にする制度や考え方のこと。この概念は、因果関係が科学的に証明されるリスクに関して、被害を避けるために未然に規制を行なうという「未然防止(Prevention Principle)」とは意味的に異なると解釈される。

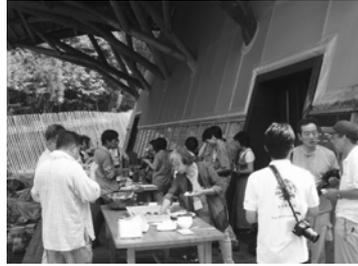
² フェアトレードとは、「公正な貿易」を意味し、途上国の農産物や製品を、市場価格よりも高い適正な価格で継続的に購入することで、途上国の人々を支援することを目指す取組み。オルタナティブ・トレードとも呼ばれる。途上国の持続可能な開発を促進するため、環境に配慮した生産方法を推奨し、より高い報酬を支払うといった配慮もなされている。



森の情報センター



沢あざみやヨモギ等、地域の食材を活かした昼食



食事を楽しみながら、交流を深める参加者達



参加者全員が自己紹介



環境省による趣旨説明



近藤氏による調査報告



話題提供 1 (吉村氏・曾我部氏)



話題提供 2 (小寺氏・山崎氏)



話題提供 3 (小森氏・杉野氏)



全体対話集会では熱心な議論が交わされた

図9:流域対話の様子

(3) 参加者アンケート結果

受付時にアンケート用紙を配布し、閉会時に回収した。アンケート回収数は 19 (回収率 63.3%) であった。

<参加者の属性>

性別は男性 11 名、女性 8 名であり、年齢別では 50 代及び 60 代が 73.7% を占めた。県別では、愛知県 (11 名) からの参加者が最も多く、次いで岐阜県 (6 名) であった。

<参加のきっかけ>

参加のきっかけとしては、「知人からの紹介」(8 名)、流域再生調査に参加 (7 名)、「メーリングリストで知った」(1 名)、「チラシを見た」(1 名) であった。

<満足度>

本対話の満足度について、「大変良い」「良い」「どちらかといえば良い」「普通」「どちらかといえば悪い」「悪い」「大変悪い」までの 7 段階で評価した結果、「大変良い」「良い」「どちらかといえば良い」の合計が 63.2% であり、概ね高評価であったといえる。

<「生物多様性流域対話」に関する意見>

「生物多様性流域対話」に関する意見として、次のような 14 件の意見が寄せられた。

地域の実情と課題を理解するための良い機会であった等、対話型の形式が評価された一方で、論点整理が不十分であった、若者や地域住民の参加が少なかったとの意見も見られた。

- 最後のまとめで、この「対話」の意義がとてもよくわかり、共感しました。この対話に参加して下さった調査先団体の方の感想を聞きたかったです。私達の団体で同じような調査と交流会を企画しているので、進め方などとても参考になりました。(20 代、女性、岐阜県)
- 流域フェアトレード(しくみ)をつくるために、調査やこのような集会があるのだと、その目的を確認できたような気がする。(40 代、女性、愛知県)
- 上流域で起こっている課題。それへの取り組みと実情を知る機会になりました。(60 代、女性、愛知県)
- 調査に行った人、された人の対談は、調査の目的、取材したことがみんなに理解してもらえてよかったです。(60 代、女性、愛知県)
- 山のこと、農家のこと、そのほかいろいろ勉強になりました。(50 代、女性、愛知県)
- 大変美味しゅうございました。(30 代、男性、岐阜県)
- モチベーション、上がりました。(40 代、男性、愛知県)
- こういう取り組みは必要ですね。継続していただけることを望みます。ただパワーポイントに頼る？必要の無いパソコンと思います。(50 代、男性、長野県)
- 対話型は非常に有効！(50 代、男性、鳥取県)
- とても内容のあるイベントでした。もっと多くの人に参加して欲しかった。(60 代、男性、岐阜県)
- もっと現地の人の参加があると良かった。調査側の準備として、もっと整理しておくことが必要だと思った。論点整理が事前にされている方が良かったのではないかな。結論で終わるより、そこから議論を深める時間が欲しかった。(60 代、女性、愛知県)
- 地域でいくつものセクターが話し合いを重ねていくことは必要。今回は、まだまだ双方向でのなげかけ、意見の出会いがあっても良い気がした。今日不足していたのは、地元が育つ話が無い。(60 代、女性、愛知県)
- 調査対象の小寺さんのグループが、昼食を提供してくださり、PPTのスライドや会話だけでなく、五感を使って楽しめた。衣・食・住の中でもやはり「食」は最も共有しやすく、各々に訴える力の強い要素だなと思った。しかしワカモノが少ない...。(20 代、女性、愛知県)
- 様々な話が聞けてそれぞれは参考になったが、何を目的にしているのかが、いまいち判りませんでした。(50 代、男性、愛知県)

2 . 生物多様性流域対話の成果と課題

<得られた成果>

民間団体の交流の促進

「伊勢・三河湾流域保全・再生調査」では、都市で活動する民間団体が調査者となり、中山間地域で活動を継続している民間団体の活動状況を調査した。本対話では、調査者及び被調査者となった民間団体等が一堂に会し、農林業等地域の営みを通じた生物多様性を守ることの重要性、都市が流域の生物多様性を収奪する構造を変えていく必要性等について意見交換することを通じて、流域内の各地域で活動する民間団体同士の交流が図られた。

また、流域の課題を共有するために、こうした対話を継続して開催していくことの重要性についても確認された。

調査結果の共有化

第1期から第3期までの「伊勢・三河湾流域保全・再生調査」をとりまとめた冊子を参加者に配布することで、地域の現状と課題についての情報を共有した。

「味わって知る」地域の恵みの検証

調査対象団体である「山菜の里 いび」の協力により、山菜やコンニャクをはじめとした地域の恵みを味わう機会を提供できた。このことにより、中山間地域において地域資源を活用した生業を成り立たせることを通じて、特産品への理解が進むと共に、こうした機会をきっかけに、流域内の都市と中山間地域における資源循環の取組の契機となった。

<今後の課題>

具体的な行動につながる議論の不足

アンケート調査結果から、流域における課題の解決に向けて都市や農山漁村で暮らす人々が、それぞれ具体的にどう行動すべきかという点についての議論が不十分であったとの意見が提示された。こうした意見を踏まえ、今後は流域の保全・再生に向けた具体的な取組の方向性を検討していくことが必要である。

幅広い層を含めた「場と輪づくり」の必要性

アンケート調査の結果から、若い世代の参加が少ないこと、より多くの団体の参加を呼びかけることが重要であることが指摘された。こうした意見を踏まえ、今後、より幅広い層を取り込んで保全・再生を進めるためには、こうした活動に関心の薄い市民や若年層を取り込んでいくための「場と輪づくり」が必要である。

そのためには、衣食住など暮らしに密接したテーマで、生物多様性の恵みを五感で感じる自然体験プログラムの実施、生物多様性保全に関する情報を共有するためのシンポジウムやセミナーなどの開催等が想定される。